



## 調査の概要

長沢遺跡の発掘調査は11日間にわたって実施された。つぎに調査の概要をまとめてみたい。

本遺跡は多摩川の形成した段丘上(第二段丘面)にあって、表土層(40~50cm)の下にローム層はなく、砂質粘土層上に炉址や遺物が発見された。これは関東ローム層が流失した後に、多摩川の氾濫により砂質粘土は堆積したものであろうと推察される。したがって、住居址のプランはもとより、柱穴の確認も困難であったが、炉址は6カ所から検出された。

つぎに検出された遺物を記してみると、土器の完形品は1個のみで、残余は破片の状態で多数出土した。その型式を考察するに、加曾利E-I式が主体で、加曾利E-II式は極めて少量であった。石器の出土は合計261点あり、その中では短冊型が量も多く、揶型がこれに次ぎ、分銅型は最少であった。ほかに磨製石器が1個、石鏃片数点が検出されている。遺跡の東側には、約1mほどの比高差を持つ断面があって、その麓と住居址との間に住居址の壁と考えられる、同一の高さの所に幅30cm程度で南北に直線の特異石組遺構が検出された。その石組みは一度溝を掘り、その中は黒色土が混入していただいで、時代を判定すべき遺物の発見は出来なかった。中に敷かれた玉石には大小の差があり、中央より南側のもは小形で北側のは大形であった。

長沢遺跡を発掘して注目される事は、小面積に6カ所もの炉址があったことと、280点にも及ぶ石器が出土したことであって、周辺で発掘されている同時期の遺跡に住んでいた人達の生活状況と異なる点があったかも知れないと推測されることである。多摩川近くのために、漁撈は相当おこなわれていたと思われるけれど、石器が多数出土していることは、竪穴造りに使用したことは当然であるとしても、その他に百合根掘りや、山芋掘りに使用されたことであろう。そして更に、原始農耕の一部に、たとえば雑草除去などにも使用されていたのではないかと想像されるのである。